

前衛芸術作家としての久野豊彦

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-12-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山崎, 義光
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007638

前衛芸術作家としての久野豊彦

山﨑藝光*

KUNO Toyohiko as one of the Japanese Avant-garde

YAMAZAKI Yoshimitsu *

ABSTRACT

KUNO Toyohiko (1896-1971) is known as one of the Japanese modernism novelists of the Showa era. Affected by the Western avant-garde works, he began to write avant-garde short stories in 1923. With the following list of all his literary works, we can see his activities. His works can be divided into three periods; (1) from 1923 to 1928, he wrote avant-garde short stories, (2) from 1929 to 1931, he took part in modernistic activity, (3) at the end of the year 1931, he made a declaration of 'Shin-shakaiha'. In 1932, he appeared a serial story 'Jinsei Tokkyu'. After that, he wrote enlightening books. He used novel and unconventional techniques in his short stories, tried to write stories cooperatively, and also advocated 'Shin-shakaiha'. It was the experimental and provocative attitude throughout his career that he tried to change the current view of the Japanese literature.

Key Words: 久野豊彦、日本文学、アヴァンギャルド、前衛芸術

1. はじめに

久野豊彦(1896-1971)は、多様な文学的試みが繚乱 した関東大震災後の大正末に前衛的手法の短篇小説を発 表して登場し、昭和初年代には新興芸術派作家の一人と して活躍しながらも、1933 (昭和 8) 年頃からはしだい に文学的な活動からは離れていった作家である。近年、 嶋田厚編『ブロッケン山の妖魔 久野豊彦傑作選』(工作 舎 2003年3月)が刊行されたことで、いくつかの作品・ エッセイには接しやすくなった。だが、これまで論及さ れることも少なく、十分にその史的な位置づけも与えら れないままになっている。たとえば、和田博文編『日本 のアヴァンギャルド』(世界思想社 2005年5月)には、 現在では参照も難しい日本のアヴァンギャルド関係基本 資料の解題や、主要な作家をとりあげた論文、年表等が まとめられており、今後の日本のアヴァンギャルド研究 にとって有益な言及が多く含まれている。しかし、その なかに久野の名前は見られない。

先に、拙論「久野豊彦における一九三〇年前後―「ナタアシア夫人の銀煙管」と「人生特急」―」(『横光利一研究』第4号 2006年3月)において、1930年前後における久野の文学活動の連続と断絶について論じた。しかし、久野の著作についてはその全貌が明らかにされてお

らず、断片的に知られているのみで整理されていない。 そこで、本稿では現在までに判明している著作一覧を掲 げ、久野豊彦の文学的な営為の概略について、前稿で触 れられなかった点を中心に述べて、先の拙論を補完する こととしたい。

2. 久野豊彦の文学活動

未だ完全なものとは言い難いが,久野豊彦が新聞雑誌等に発表した作品,エッセイ,そして参加した合評・座談会記事等の一連の活動を文学活動として捉え,その著作一覧を本稿末尾に付した。ここでは,同時代の動向もふまえてその概略を述べていきたい。

大正末から昭和初期は、日本の近代文学における大きな画期である。そのことについては様々な角度から論じられてきている。たとえば、事件を一つの区切りとし、関東大震災や芥川龍之介の自殺を画期とする見方がある。あるいは、プロレタリア文学の隆盛を中心に据えた見方や、ダダや表現主義の影響の下に斬新な表現が試みられ、新感覚派と呼ばれる横光利一らの動向の現れがあったことをとりあげることもできる。また、江戸川乱歩の登場から探偵小説が盛んに書かれるようになったこと、一般大衆を多くの読者として抱えた婦人雑誌・大衆雑誌などが部数を増大し大衆文学が隆盛するなど、それまでとは量的・質的にも大きな変化が現れた時代としてとらえることもできる。久野の文学活動は、ちょうどこうした日本の近代文学史における画期的な出来事が生じた大正末から昭和初期にあたる。

2006年4月12日 受理

* 総合工学システム学科 一般科目文系

(Dept. of Industrial Systems Engineering : Liberal Arts)

久野豊彦の短い文学活動の期間は、(1)1923 (大正12)年から1928 (昭和3)年頃までの前衛的手法の作品創作の時期、(2)1929 (昭和4)年から1931 (昭和6)年にかけて、新興芸術派作家の一人として文壇で活躍した時期、(3)1931 (昭和6)年末の新社会派の提言、1932 (昭和7)年の「人生特急」の発表から、その後啓蒙的著作を発表した時期のおよそ3つの時期にわけてみることができよう。以下では、この区分にしたがって久野の文学活動の軌跡をたどってみたい。

2-1 1923 (大正 12) 年から 1928 (昭和 3) 年まで 久野の作品は、短篇小説を中心とし、その表現の斬新 さとそれゆえの難解さによって特徴づけられる。そこに は、20世紀初頭の表現主義、未来派やダダイズムなどの 欧米におけるアヴァンギャルド芸術の影響を看取するこ とができるだろう。

ところで、avant-garde という言葉は、日本において 「アヴァンギャルド」「前衛」として、当時の社会におい ては、共産主義の理念にもとづく政治的前衛と革新的芸 術運動としての芸術的前衛との2つの意味で用いられた。 波潟剛!)は、大正から昭和にかけての日本において、こ の用語がどのように使い分けられ、用語と意味が変遷し たかについて論じている。が、本稿で久野に「前衛芸術 作家」と冠したのは、当時の用語としてよりも、現在の 目から久野の文学活動を評価しながら、欧米の革新的芸 術運動の影響下に、日本語による挑発的、実験的な表現 を追求し実践した作家として、その文学的な営為を位置 づける意味においてである。久野が文学史上でよく知ら れているのは、1929 (昭和 4) 年末にプロレタリア文学 派に対抗する作家らが結集した"新興芸術派"の代表的 "モダニズム"作家としてである。この時期の久野が主 に著作を発表していたのは、"モダニズム"派の雑誌とし て知られた『近代生活』や『文学時代』といった雑誌で あった。本稿では、そうした従来の位置づけとは異なる **外野の文学的営為の意義づけを前景化したいという意味** をこめて表題とした。

久野が登場し活躍した時代には、文学だけではなく、広く芸術一般において芸術的前衛運動がおこっていた。 大正末の日本の美術史について論じた五十殿利治²⁾ は、1920 年から 1925 年までの「ヨーロッパの立体派、未来派、表現派、さらに第一次世界大戦後のダダや構成主義に鼓舞されつつ、関東大震災前後の激しく変化する思潮のなかで、新しい表現形式を模索した若手作家たちが参加して急速に盛り上がった急進的な動向」を「大正期新興芸術運動」として捉えている。柳瀬正夢、村山知義、尾形亀之助らによる『マヴォ』の革新的芸術運動がよく知られている。1920 年前後には欧米のアヴァンギャルド 芸術の紹介や作品が現れ、以後文学の領域においては、たとえば、高橋新吉、辻潤、萩原恭次郎、そして久野とも親交のあった吉行エイスケらによるダダイズムが"虚無主義"的な傾向をともなって現れる。しばしば指摘されているように、欧米での芸術的前衛の多様な派・主義が、日本において、そのままそれぞれの派や主義ごとに区別されて受容されていたわけではない。欧米における発生の順序や性質とは必ずしも一致せず、未来派も表現派もダダイズムも渾然とした様相で受容されていたといえる。

周知のように、プロレタリア文学派の雑誌『文藝戦線』の創刊も1924(大正13)年6月であるが、『マヴォ』の創刊が同年7月、「新感覚派」の名称が現れるきっかけとなった雑誌『文藝時代』の創刊されるのがやはり同年10月である。日本の1920年代はプロレタリア文学派の政治的前衛と、欧米のアヴァンギャルド芸術への共感から生じた革新的芸術運動とが共起し、もっとも活気あふれた時代である。政治的前衛は、その政治理念の啓蒙宣伝と革命に向けた実際運動へのコミットとして展開された運動であるが、芸術的前衛は、その表現の質によって従来の表現の枠組みを革新し、それによって社会にはたらきかける志向をもっていた。革新を目指す点では、同時に起こっていた政治的前衛ともその志向性において通底し、広義に芸術の社会化が自覚された時代であったといえる。

さて、以上のような同時代の動向をふまえていえば、 久野豊彦の文学活動が雑誌『葡萄園』で開始されたのは、 ちょうどこうした運動が盛んとなった時期にあたり、これら同時代の動向につらなるものであった。

最初の作品発表の舞台となったのは、1923(大正12)年9月に創刊された同人雑誌『葡萄園』である。久野が『葡萄園』に発表した著作について、本稿末尾に付した一覧に含まれているものはすべて確認した。だが、『葡萄園』は散逸している号も多く、未見のために全冊は調査できていない。未見の号を通巻号数で記すと、1927(昭和2)年5月以降の、30(5年4号)、31(5巻5号)、33、34、37、38、41、43、49、51、52の各号である。久野は、1926(大正15)年1月号(第4年第3号、通巻22号)まで、1926(大正15)年1月号(第4年第1号、通巻20号)を除き、毎号この雑誌に作品を発表している。その間に、1924(大正13)年12月『文藝時代』の川端康成「新進作家の新傾向解説」でこの雑誌が言及され注目されることとなった。

1926(大正 15)年以降は、『三田文学』をはじめ他の雑誌にも作品を発表するようになる。そして、1926(大正 15)年10月『新潮』に「桃色の象牙の塔」を発表、1927(昭和2)年1月には第42回「新潮合評会 新人の観たる既成文壇及び既成作家」に新人として参加し、文壇に登場

する。この年12月には、最初の著作集『第二のレエニン』 (春陽堂)を刊行する。

この時期までの作品は、未来派等の前衛芸術の影響を 受けた、実験的で斬新な表現を駆使しており、同時代の 諸作家のテクストと比べても突出している。この時期に 自らの創作手法や小説観について述べたエッセイは少な いが、「小説構成の断想」(『虚無思想』1926年6月)、「文 学の必然的推移」(『文芸公論』1927年1月) がある。後 者の冒頭では「芸術に、これまで附與されてゐた永遠性 の特権は、いまや、剥奪されんとしてゐます。そして、 鼻紙かスイガレットのやうな短命なものになつてきてゐ る」と述べられる。作者自身の内面や体験した事実の再 現として文学の表現を把える文学観が主流であった時代 に、そうした文学観からはかけ離れている点で特異であ り、文学も含めた芸術一般の新時代における変容(「推 移」) が自覚されている。 久野の短い文学活動の全期間に わたって言える特徴の一つは、常に新しい表現を追求し 試みる「実験的態度」3だといえる。それゆえに、リア リズムを基本とする文学観が一般的だった当時の文学理 解の枠組みからははみ出すものだった。

2-2 1929 (昭和4) 年から1931 (昭和6) 年まで

ちょうど日本の芸術的前衛運動が一段落した 1927 (昭 和 2) 年 4 の翌年, 1928(昭和 3)年に久野が発表した著作 は少ない。この頃には、マルキシズムへの対抗言説の支 柱となるC・H・ダグラスの経済学説を学んでいる。1928 (昭和3)年12月の『三田文学』に寄せた「回顧一ヶ年」 のアンケートには、「今年は殆どこれと云ふ程の仕事がで きませんでした」「全く憂鬱です」と記しながら、「ただ しかし、ダグラスの経済学説に興味を感じだした事だけ は、ちょっと愉快な気がします」とも述べている。加え て「芸術小説が次第に行詰つてきたのは事実です。これ に就て如何なる方策があるか。時代が通俗小説を要求す るからと云つて、そちらへ走るのも、なんとも能なきこ とではなからうか」とも記している。1929 (昭和 4) 年 から再び活発化する久野の文学活動は、プロレタリア文 学派の文学観。旧来のリアリズムを基調とする文学観と の対抗を軸にして展開しつつ新たな実験が試みられる。

この年,1928 (昭和3)年11月の横光利一「文芸時評」 (『文藝春秋』)を皮切りに、以降翌年にかけて、諸種の 文芸雑誌・新聞紙上で、プロレタリア文学派の文学大衆 化論争に絡み、横光利一や中河與一らを中心として多く の論者を巻き込んだ形式主義文学論争が交わされる。

久野はこの論争に先立って,第42回「新潮合評会 新 人の観たる既成文壇及び既成作家」(前掲)で,村山知義 らとの間で形式主義文学論争の争点を先取りする論点を めぐってやりとりをしており,それについて「芸術の体 温表」(1927年3月『新潮』)でも論じていた。それゆえに、形式主義文学論争が始まるといち早く、「確か一両年前の新潮合評会でも村山知義氏や林房雄氏は、内容が形式を決定するといひ、私は寧ろ形式が内容を決定すると主張して一寸論戦したことがありその翌月の不同調の合評会でもこれら内容と形式の問題が大いに討論せられたかに記憶する」。『と記しながら、形式主義派の立場から「形式と内容に就て」(『都新聞』1928年12月4~8日)の一文を発表している。

とともに、この論争と歩調を合わせるように、資本家に搾取される労働者といった生産関係にのみ着眼点が集中する当時のマルキシズム、プロレタリア文学を批判し、金融と流通・消費が生産に対して支配的な影響力を有することを視点にもつ、ダグラスの経済学説を理論的支柱として文学論を展開するようになる。最初のまとまった評論として、1929(昭和 4)年 2 月に「芸術派と新経済学説」(『新潮』)を発表する。これは、とくにプロレタリア文学派に対抗し、芸術派としての表現手法を文学論的に位置づけようとするとともに、その後の自らの文学活動の方向性を見いだそうとするものであった。

1929 (昭和4) 年から 1931 (昭和6) 年にかけてが, 久野の文学活動がもっとも活発な時期だった。主な発表 誌は、『新潮』と 1929 (昭和4) 年に創刊された『近代生活』『文学時代』で,とくに後二者はいわゆるモダニズム 系の雑誌である。この時期の活動がよく知られているために, 久野はしばしば "モダニズム作家" と呼ばれる。 座談会にも,新興芸術派の代表格としてしばしば参加しており,1930 (昭和5) 年から翌年にかけて,判明しているだけでも 16 回を数える。また,この年は著作集も,4 月に創作集『連想の暴風』(新潮社),5 月に評論集『新芸術とダグラスイズム』(天人社),7 月に創作集『ボール紙の皇帝万歳』(改造社)と矢継ぎ早に3 冊を刊行している

こうして一段落した久野は、この後、新興芸術派としての新たな試みとして、複数の作家とともに「共同制作」小説を試みている。1930 (昭和5)年10月の『中央公論』に、龍胆寺雄・浅原六朗とともに「1930年」を、11月の『近代生活』には、吉行エイスケ・楢崎勤とともに「恋愛予算帳」を発表する。小説を複数の人たちが関わって制作する試みは、プロレタリア文学派においても同じ頃に現れる。労農芸術家同盟からは1930 (昭和5)年9月に「共同製作に関するテーゼ」(『文藝戦線』)が出され、作品としては、同号に鶴田知也・管野好馬「町工場」が掲載されているほか、鶴田知也・管野好馬「町工場」が掲載されているほか、鶴田知也・管野好馬「町工場」が掲載されているほか、鶴田知也・青木壮一郎・里村欣三「工場閉鎖」(『読売新聞』1930年9月18日~11月4日)、岩藤雪夫・小島島・里村欣三「柵の外へ」(『文学時代』1931年1月)が現れる。日本プロレタリア作家同盟

からも組織的に批判を加えながら作品をつくる「組織的 生産」がおこなわれた。共同制作「1930年」は、そ の題の如く、日本の1930年の社会現象を表象しようとし た作品であり、それまでの久野の創作手法とは異質であ る。共同制作の試みはこの時限りで続かなかったが、そ の方向性は新社会派の主張として展開することになる。

1931 (昭和 6) 年に入ってからも、前年同様精力的に作品やエッセイを発表し、座談会に参加しているが、この年の後半頃から、新興芸術派全般に行き詰まりの様相を呈する。久野は参加していないが、1931 (昭和 6) 年9月の『近代生活』に掲載された座談会「文壇の現状を論ず」は、その意味で注目すべき記事である。この座談会のなかで、龍胆寺雄は「近代主義文学」は「クラシックの文学」へ引き返さなければならないと述べている。

龍胆寺 近代主義文学も吉行エイスケで行止まりだ。引返さなければならない。それはクラシックの文学へ引返して来る。それ以上発展すると読者から見離されちやふと思ふ。これは近代主義文学に付いてだけれども。外の文学も或程度尖端的に行つては引返す,其先に行くと読者層の現実と非常に離れて行くのだ。近代主義文学では吉行エイスケが花形になつて居るけれども,其先に行く事はない。行つたら分らなくなる。

岡田 久野豊彦氏は其先を行って居るかね? 龍胆寺 久野君より吉行君の方が行って居ると思 ふ。

中村 本質的に吉行氏は新しい。

龍胆寺 これ以上発展されると読者はポカンとするより外なくなる。非常に文学に精通しようと云ふ特殊な文学青年は別として普通のヂヤナリズムを取捲いて居る人達に取つてはね……

「近代主義文学」「クラシックの文学」として名指されている内実は、ここではあまり明かではないが、「近代主義文学」の代表格としてダダイストを標榜して登場した吉行エイスケとともに久野の名が挙げられていることからすれば、斬新なるがゆえに意味不明にも近づく表現を特質とする作品が「読者層の現実と非常に離れて行く」ために受け入れられなくなることを予感していたといえる。その予感の根柢には、急速に肥大化した大衆読者の存在が認識されていることがわかる。この後"新社会派"を標榜する久野の方向性はこうした時代の趨勢と関わっている。

2:3 1932 (昭和7) 年以降

1936 (昭和 6) 年頃から, エロ・グロ・ナンセンスを 基調とし都市風俗を好んで題材としてきたモダニズム文 学に失調がみられるとともに, 大衆文学が隆盛する。社 会的な事件としては、昭和恐慌、満州事変の勃発、社会 主義・共産主義運動への弾圧強化がおこる。

こうした背景のなかで、新たな展開を模索していた久 野は、1931 (昭和6) 年末に、「新社会派小説 新芸術創 造への提言」(『読売新聞』1931年12月13~16日)を発 表し、浅原六朗らとともに"新社会派"を標榜する。こ の「提言」は、1930 (昭和 5) 年までに久野が主張して いた、ダグラス経済学を理論的な支柱とした文学論の延 長上にある。提言の要点は次のようなものである。「マル クス主義文学といへば、最も社会性を豊富に持つた文学 であるかのごとく云はれてゐた」。「しかし、考へて見る と、その社会性を豊富に持つたマルクス主義文学も、単 に労資対立の関係を基礎として成立した文学にすぎな い」。「今日のごとく、労資を合一した生産者の上に、強 靭な潜勢力をもつて, 購買力の大部分を壟断してゐるの は,例の銀行金融業者だ。この銀行金融業者に対しては, 何等の信用の社会的統制力を持たない現代人が、新たに 統制力を把握すべきは、最も重要なことであり、且つ、 信用の社会的統制によつて、新たに、現代の畸形的な社 会経済生活を根本的に改造しなければならぬのだ」とす る。そして、新社会派文学は、「新しい角度を持つた技術 で、現実の経済機構、そこから生起する経済現象を、あ りのまゝに、一応受け取つて、これを分析考究して、新 しい社会観の下に、これを活写」するのだと主張する。 加えて、こうも述べている。「ともすると、芸術派の作家 たちは芸術を何か、偉大なものゝ如く考へてゐる。しか し、芸術とは、新らしい角度を持つた技術以外の何物で もないのだ。若し、それ以外の何物かがあると考へたら、 それは恐らく、空つぽの芸術の神様位のものだ」。

1927 (昭和 2) 年までの久野の文学活動が革新的な表現を追求した作品の創作を中心としたものであったとすれば、新社会派としての久野は革新的な表現の追求と社会変革の主張とを結びつけようとしたところにあったといえる。先に引用した座談会において龍胆寺の発言にあったように、「読者層の現実と非常に離れて行く」との認識を浅原や久野もまた共有していたことも、新社会派の提言に作用していたであろう。それは、運動として成功したとは言えないが、前衛作家としての実験的態度は一貫していたといえる。

しかし、作品に先立ったこの「提言」は、1932(昭和7)年に入ってもまだ提言にとどまっていた。「混沌たる現文壇」(『近代生活』1932年5月)で、久野は、新心理主義や新ロマン派等の新しい文学理念の提唱があいついでいるが、未だ「これはと云ふ、眼立つた仕事は現れてゐない状態」で、「通俗文学」に対する「純粋文学」の追求を目指しつつも、新しい文学をそれぞれに模索して「混沌たる」ありさまだという趣旨のことを述べている。こ

こからは同時代の動向の認識よりも、久野自身の模索と 迷いがうかがえるとともに、久野自身が提言する新社会 派の方向性が述べられている。「純粋文学が、今後、いか なる方向へ進展してゆくかは、予断を許さないけども、 より現実に接近した文学が、芸術派からも分離して擡頭 してくると同時に、この派の文学派、恐らく、マルクス 主義文学が提唱してゐた文学の社会学的批判の下にあつ た文学を更に拡大せしめて、いよいよ、複雑化してきた 現実の社会を焦点として、所謂、文学の素材を大いに拡 大するにちがひないのだ」。しかし、同時代の他の論者た ちからは、こうした"新社会派"の主張が、プロレタリ ア文学派のリアリズムなどと大差のないものに見えてい たことが、1932(昭和7)年5月の『新潮』の座談会記 事「新しき文学の動向に就て」を見てもうかがえる。

久野は新社会派の提言にしたがって、翌月には「不景 気と失業」(『新潮』1932年6月)を発表するとともに、 長篇小説「人生特急」を、1932(昭和7)年6月10日か ら10月7日にかけて『時事新報』に連載する。また、新 社会派としての主張は、浅原六朗との共著『新社会派文 学』(厚生閣書店 1932年7月) にまとめられるととも に、浅原六朗と株式売買をするための事務所「R·B·C」 (レッド・アンド・ブルー・クラブ) を開設する (「新社 会派的相場師 浅原六朗, 久野豊彦両君」『読売新聞』1932 年7月27日朝刊4面)。しかし、単行本化された『時局 経済小説 人生特急』(千倉書房 1932年11月) は、当 代の社会経済現象を題材として多く取り込んだ小説であ ったがゆえに発禁処分となる。久野が「「人生特急」発禁 について」(『新科学的』1932年12月) に記していると ころによれば、モデル小説として時事的な題材を盛り込 んだ「時局経済小説」として書かれていたため、連載中 にも「警視廳から、注意をうけた個所があつた」が、「単 行本では集中的になりすぎるからいけないし、さらに、 現在の社会情勢から云つて、よくない」との指摘をうけ たようである。また、株式売買の方も失敗に終わった (「(春のヴァリエテ 第二景) 浅原・久野の巻」 『読売新 聞』1933 (昭和8) 年3月9日朝刊4面)。

この後、1934(昭和9)年以降には、雑誌『月刊文章』や『日本現代文章講座』に文学表現の技術に関するエッセイを書いている。創作からは次第に離れていくが、変転する社会への眼差しは持続しており、冒険記やソ連事情論、青年の処世に関わる啓蒙書等の翻訳や自著を刊行している。

3. おわりに

外野豊彦の文学活動の期間は短いが、1928(昭和3)

年までに発表した斬新な創作手法の作品群,1929 (昭和4)年から1931 (昭和6)年にかけての新興芸術派としての活動,そして共同制作の試みや1932 (昭和7)年以降の新社会派としての文学活動など,以上でたどってきた文学活動の軌跡に一貫しているのは、旧来の文学観に対して挑発し、つねに新しい試みで働きかける実験的態度であった。

本稿では、久野の著作を年代ごとに展望することに終始した。今後は、同時代の革新的芸術運動との関連を含めた作品論や同時代に提起されていた様々な主張との間の差異を見極めつつ、久野の提起した文学論上の問題について批判的に検討することなどを通じて、従来見過ごされ過小評価されてきた久野の文学的営為のもった意義と可能性について考究することが求められる。

参考文献·註記

- 1) 波潟剛『越境のアヴァンギャルド』(NTT出版 2005 年7月)「序章 挑発する理念」
- 2) 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』(スカイド ア 1995 年 3 月)
- 3) 嶋田厚「久野豊彦ノート」(『文学』1971年8月)
- 4) 和田博文「都市の崩壊と、精神の解放区― 一九二〇年代のアヴァンギャルド ―」(和田博文編『日本のアヴァンギャルド』2005年5月)は、アヴァンギャルド芸術が1927年には一つの区切りを迎えたとしている。
- 5) 引用文中の「不同調の合評会」は、1927(昭和2)年3月号『不同調』の「不同調合評会 既成新進対抗の文壇」を指す。参加者は、片岡鉄兵・横光利一・石濱金作・金子洋文・山田清三郎・林房雄・堀木克三・浅原六朗・藤森淳三・森本巌夫。この合評会でも、久野が言及しているように、とくに林房雄と横光利一との間に形式と内容をめぐるやりとりがある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、とくに諸雑誌の合評会・座談会記事に関する部分については、日本学術振興会 2003~2005 年度科学研究費補助金(基盤研究C)を受けた共同研究「近代日本における〈座談会〉の成立過程についての動態的・総合研究―雑誌メディアにおける基礎的調査を中心に―」(研究代表者:佐藤伸宏)での資料調査の成果が含まれている。記して感謝の意を表したい。

久野豊彦著作一覧

【雑誌・新聞・共著所載の著作】

加年	月	Ħ	掲載誌	卷号	題名	単行本・初収	^{球里行本} 発行所	(備考
1923	9		葡萄園	1-1	#	第二のレエニン	老領堂	
1923			葡萄園	1-2	霊魂の轢死		2 79 2	
1924	1		葡萄園	2-1	玩具	 	-	
-	2		葡萄園	2-2	耳鼻咽喉科病院		-	
1924	2					<u> </u>		「注目(十二十二左注)」の言葉で
1924	4		葡萄園	2-3	心の珠数	-		「満月(大正十二年作)」の表題で。
1	-				娘			
	-			1	日傘			
į					花合			
į				1	十五夜祭		1	
1	j				夏の夜			1
		1			満月			
					口笛		-	-
-					窓	 	-	·
- 1	-				猫の耳	 		-
					殺人	 		-
					1	 		-
İ					標点	 		_
					タやみ	 		
				İ	くもの巣			
					蓮華			
1924	5		葡萄園	2-4	老婆			
1924	6		葡萄園	2-5	楽観の経			
1924	7		葡萄園	2-6	腹水			
1924	8		葡萄園	2-7	花火の顔		_	
1924	10		葡萄園	2-8	徒然草一卷	連想の暴風	新潮社	
1924	12		葡萄園	2-9	郵税	第二のレエニン	春陽堂	
1925	1		葡萄園	3-1	愛の刑法	<u> </u>	_ = = = = =	
1925	2		葡萄園	3-2	朱の梅	<u> </u>		15
. 520	-			-	夏の動静		+	-
					雨を呼ぶ	<u> </u>	+	+
								4
-				1 .	魚と人	-		-
ļ	-				大久火 一	-		4
. 1				1	百人一首			4
	_			+	(ひる過ぎて)		1	
1925	3	\rightarrow	葡萄園	3-3	満月の島	第二のレエニン	春陽堂	
1925	6		葡萄園	3-4	春爛漫の盲唖学校庭			
1925	7		葡萄園	3~5	頤髭無限大の水泳選手			
1925	8		葡萄園	3~6	昼夜二枚の音楽的リリィーフ			
1925	9		文芸時代	2-9	(掌編小説)一九二〇年代の人間紛失	第二のレエニン	春陽堂	
1925	11		文芸時代	2-11	(文壇観潮語)西遠人の敬礼に対して			
1925			葡萄園	3~7	天国滿員御禮			
\longrightarrow	12		葡萄園		われら及神の耳		+	
1926	2		葡萄園		明日の労働者		-	
1926			葡萄園	4-3	日英同盟破棄			
	4		三田文学	1-1	ある転形期の労働者	海椎の単節	新潮社	
1926						連想の暴風		
1926	5	\rightarrow	辻馬車	2~5	第二のレエニン!	第二のレエニン	春陽堂	<u> </u>
1926		+	三田文学	1-2	物質の門			
1926	6		虚無思想	1~3	小説構成の断想			
1926	7		三田文学	1-4	ナタアシァ夫人の銀煙管		-	
1926	9		新小説	31-9	化粧学校のファスシスト	第二のレエニン	春陽堂	
1926	10	1	新潮	23-10	桃色の象牙の塔			l
1926	11		近代風景	1~1	貝殻の手紙			
1926			葡萄園	4-7	ヱルドマン氏の途方もない栄達	第二のレエニン	春陽堂	
1926			三田文学	1-9	水上滝太郎氏の近葉			
			C F	-	六号雑記		_	†
				+-			+	舟橋聖一・葉山嘉樹・林房雄・久野豊彦・
1927	1		新潮	24-1	第四十二回新潮合評会「新人の観たる既成文壇及既成 作家」			原伸二郎・森本嶽夫・村山知義・崎山献逸 富澤有為男 〇中村武羅夫(司会)
			A BA	+	文学の必然的推移		_	
1927	1	1						
1927	1	+	文芸公論	1-1				
1927 1927	1	+	ス芸公舗 三田文学	2-1	運河の夜景			

1927	3		手帖	1	海底の鼻眼鏡			
	4	-	手帖	2	色合戦	-		
1927 1927	4		三田文学	2-4	ソヴェート・ロシアの老政治家	ボール紙の皇帝万歳	2h : 4 + 1	
1927		-	文芸時代	4-5		小一ル私の至市力級	以地化	<u> </u>
			大公時代 手帖	4-5	(創作一人一評)片岡鉄兵作「色情文化」 怪談	 		
1927	6	_		1-6		第二のレエニン	SER MA	-
1927	6	-	文芸公論	+	小品・昇降器	第二のレエーン	春陽堂	
1927	7		手帖	5	痩せた女			
1927	8	į	手帖	6	乳房		-	× ·
1927	8		*** A SA	1-8		ボール紙の皇帝万歳	24.4F	
1927	0	ĺ	文芸公論	1-8	ボール紙の皇帝万歳	小一ル私の差市力象	以近江	
					(自分の作品に対する批評をどう観るか―現代作家二 十三氏―)瑞色含春			
1007			·c#==	0.0		**	0C 3041	
1927 1927	9		近代風景	2-8	彼女と盗人	連想の暴風	新潮社	
	-:		手帖	7	秋に女の小便をする歌		<u> </u>	
1927	9		文芸公論	1-9	(われら如何に進むべきか)物を云ふ			
1927	9		三田文学	 	青いガス燈―中河與一氏の「恐ろしき私」に就て	ļ		
1927			手帖	8	フロック・コオトの男	<u> </u>		- '
1927			文芸公論	1-10	(最近観たもの読んだもの)実弾射撃派			
1927	.11		手帖	9	腋臭			
1927	12		文芸公論	1-12	ブルジョア文壇の崩壊とプロ将来			
1928	1		三田文学	3-1	新春の顔			
1928	2		文芸公論	2-2	二つの顔の箱			
İ		İ			 (蔵原伸二郎氏新著「猫のゐる風景」評)裏側の花・獣・			
1928	2	Ì	三田文学	3-2	(風水中二郎氏制者・細ひぬる風泉」計/表開の化・歓・ 人			
			A17- P = 1		LP-12 1 - Al-1-Al-			
1928			創作月刊	1-3	ギリシヤの旅に就て	新芸術とダグラスイズム	大人社	
1928	7		近代風景	3-7	うしろ姿		*****	
1928	7		新潮		シャッポで男をふせた女の話―大用現前不存軌則―	連想の暴風	新潮社	
1928	8		近代風景	3-8	雨よ! あげれ!			
1928	8		三田文学	3-8	垢			
1928	10	_ i	創作時代	2-10	これらの新人について			
1928	12	İ	三田文学	3-12	(回顧一ヶ年)			「一 今年の自分/二 最も感銘深かつたも
		_						の/三 感想など」に答えた記事。
1928	12	4	都新聞	<u> </u>	形式と内容に就て	<u> </u>		12/4,5,6,7,8の5回
1929	1		新潮	26-1	(勝本清一郎・大宅壮一氏の印象―新作家の人と印象			
		_			(4)―)昔は宗匠頭巾に白足袋だつたのが			
1929	1		創作月刊	2-1	(推奨する新人)			「吉行エイスケなぞ。」以上全文
1929	1	ļ	三田文学	4-1	(わが賀状 往復ハガキ回答)			
1929	2		新潮	26-2	芸術派と新経済学説	新芸術とダグラスイズム	天人社	
1929	2	- 1	創作月刊	2-2	形式は価値			
1929	2		三田文学	4-2	(プロフィール(二)蔵原伸二郎の横韻)蓮社の逸			
1929	3	l	新潮	26-3	薔薇の花のついた寝台	連想の暴風	新潮社	
1929	4	2	読売新聞	朝刊	試練と誤謬のもとに 北青野両氏の論戦に対して			1929.4/2,3,5,6の4回連載。
1929	5		近代生活	1-2	スポルティフな女の詩集	ボール紙の皇帝万歳	改造社	
					文芸都市合評会—昭和四年四月二日於紀伊国屋楼上			久野豊彦、雅川滉、坪田譲治、舟橋聖一、
1929	5		文芸都市	2-5	―1 文学の近代性について、2 プロレタリヤ文学の将			胆寺雄、古澤安二郎、中村正常、飯島正、 伏鱒二
1929	9		人工即巾	2-5	来、3 形式主義文学論、4 各々の文学的立場につい			
					т —		<u> </u>	
1929	5		文芸レビュー	1-3	形式主義文学理論を如何に観るか―短信―			
1929	6		中央公論	44-6	(午前零時の文明)時計が空つぽになつた時刻	ボール紙の皇帝万歳	改造社	
1929	7		新潮	26-7	(モダン移動風景)朦朧ダンサーの手記	ポール紙の皇帝万歳	改造社	
1929	7]	葡萄園	7(42)	これこそ嗤ふべきだ			
	نــــ	i			BUDOEN EPILOGUE			
1929	7	1	文学時代	1-3	女の顔がたくさん針金にぶらさがつてゐる			
1929	7	- [文芸レビュー	1-5	(アンケート)芸術価値の本質に就て			
1929	8		近代生活	1-5	(省線レリー風景)新宿より品川まで			
1929	8		文学時代	1~4	(新進十五作家論)中河與一論			同じ欄に、楢崎勤「テイブル・エロテイスト・ク
1020				-	(A)WE I TELEVISION TO THE			野」
1929			読売新聞		悲劇を食べに			
1929	9	ı	近代生活	1-6	ダグラス万才!			
		1		1-6	ザンバ!	連想の暴風	新潮社	文芸家協会編「日本小説集 第6輯(昭和5
								年版)」(新潮社 1930)所収
1929			詩神	5~9	超現実派とプロレタリア派		·	
1929			新潮		文壇的遺産の再批判―その四・森鷗外論―	·		
1929			葡萄園		楢原勤さんは純白と薔薇色との象牙の玉だ			
	10		文学時代	1-6	動いて仕方ない	艶文蒐集	第一書房	
1929	1							
1929	_				北京の頃の娘	連想の暴風	新潮社	

1929	11		新潮	26-11	(十二・尖端人の多角的検討 川端康成論)満月吟花?			
1929	11		新潮	26-11	(十二・尖端人の多角的検討 龍胆寺雄論)生活に垢が ない		:	
1929	11	+	文学	2	新文学とその任務に就て	新芸術とダグラスイズム	天人社	
1929			ヘチ 文学時代	1-7	月にでも登ってみたい―どうもあんまり恥しいので―	ポール紙の皇帝万歳		
1929			新潮	26-12	昭和四年に発表せる創作・評論に就て 本年度の仕事 に就て			
1929	12		文学時代	1-8	(来年は何をするか―一九三〇年に対する私の希望・ 抱負・計画―)			
					ポオル・モオランから私へ	艶文蒐集	第一書房	
1930	1		中央公論	45-1	布哇の月・水・兵!	連想の暴風	新潮社	
1930	1:		近代生活	2-1	青龍旗	連想の暴風	新潮社	
1930			新潮		(一九三〇年型)経済的進歩へ			
		1			(前衛に立つ人々のクロオズ・アップ)中河與一	艶文蒐集	第一書房	「艶文蒐集」には、「青年紳士・中河與一」の 題で収録。
İ		- 1			月で鶏が釣れたなら	連想の暴風	新潮社	
1930	1		文学	4	彼と彼女	ボール紙の皇帝万歳		
1930	1	+	1930	3-1	海の街にて			
1930	2		近代生活	2-2	文芸時評―新芸術派の躍進―			
			21,422,14		新年創作合評会			中村武羅夫、浅原大朗、川端廉成、龍胆寺 雄、加藤武雄、久野豊彦、吉行エイスケ、大 等三郎、楢崎勤、嘉村磯多、岡田三郎
1930	2	i	新潮	27-2	ダグラス印象記	新芸術とダグラスイズム	天人社	
1930			新潮	27-3	(新らしき作家は既成作家を如何に批評するか)谷崎潤 一郎氏のエロチシズム			
					芸術派とプロ派の討論会―第七十九回新潮合評会			川端康成、小島島、平林たい子、久野豊彦 雅川滉、林房雄、龍胆寺雄、村山知義、武! 麟太郎、阿部知二、中河與一、中村武羅夫
1930	3		近代生活	2-3	虎が湯婆をかかえている	艶文蒐集	第一書房	
	٦			- "	(わが恋愛史)冷たい生活	艶文蒐集	第一書房	
İ				}	(試写室)「アスファルト」について	20717271	31 = 31	
		li			彼と彼女			
1930	3	2	週刊朝日	17-10	鏡に追はれて	ポール紙の皇帝万歳	改造社	
1930		- m- 4	近代生活		(女百貨店)白い脚を見せる女	.,		
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	- ":		AT 1 4 mm 7 m	i= '	(試写室)何が彼女をさうさせたか			
					芸術派・プロレタリア派討論座談会			久野豊彦、大宅壮一、龍胆寺雄、楢崎勤
1930	4		新潮	27-4	(彼女の横顔)パルセロナの微笑	ポール紙の皇帝万歳	改造社	
					文芸・美術・建築・機械の交流に就いて語る 第八十回 新潮合評会			東郷青児、古賀春江、阿部金剛、村山知着 新居格、板垣鷹穂、飯島正、川端康成、久 豊彦、中村武羅夫
1930	4		文学時代	2-4	虎に化ける	連想の暴風	新潮社	
1930	5		新潮		新芸術派は何故に抬頭したか?	新芸術とダグラスイズム		
1930			近代生活	2-5	文芸時評―二三の評論について、創作は三派鼎立、その他―		J.,	
	ı				床惚れ			
1					ブロッケン山の妖魔	ボール紙の皇帝万歳	改造社	
1930	5		文学時代	2-5	連想の暴風	新芸術とダグラスイズム		
1930				1	あの花! この花! 一あ! モダアニズムの垢よ!		春陽堂	
1930			近代生活	2-6	(街の悲喜劇)看板が落ちてくる	艶文蒐集	第一書房	
- 1				1	新芸術派への非難に対して			
					ストライキと人格			
-					(試写室)「街の娘」を見る			
				既成芸術派検討座談会			雅川滉、舟橋聖一、久野豊彦、小林秀雄、 行エイスケ、龍胆寺雄	
1930	6		新潮	27-6	新興芸術派批判会 第八十二回新潮合評会			徳田秋声、千葉亀雄、佐藤春夫、川端康成 久野豊彦、阿部知二、龍胆寺雄、雅川沸、 村武羅夫
1930	6	Ĺ		i.	モダアンな栗のイガ	芸術派ヴァラエテー	赤爐社	
1930	6		文学時代	2-6	横浜の夜	艶文蒐集	第一書房	
1930	6	18	時事新報		モダン派文学			1930.6/18,19,20の3回
1930	7		近代生活	2-7	文芸時評―新興芸術派への批判又は攻撃に対して、六 月号の優れた作品について—			
					ツエッペリン倫敦襲撃			
St. 1 Market Stands Stands					尖端婦人生活漫談会			阿部ツヤコ、瀧田静枝、駒井玲子、一木蕃子、メイ牛山、中村進治郎、龍胆寺雄、柏甸 動、飯島正、吉行エイスケ、久野豊彦
	7		文学時代	2-7	新興芸術派の人々とその作品に就いて(文学時代座談			德田秋声、千葉亀雄、新居格、龍胆寺雄、 川滉、久野豊彦、植崎勤、阿部知二、淺原 朗、中村武羅夫、加藤武雄

1930	8		近代生活	2-8	新興芸術派は果たして無内容であるか			
1930	8		新潮	27~8	文学技術その他			
1930	8		文学時代	2-8	器械のなかの痴情			
1930	8	6	読売新聞	朝刊	大森義太郎氏に与ふ			1930.8/6.8の2回。6/3「蘇売新聞」朝刊の 茲時評」欄で大森義太郎が「いはゆる新芸 派の作品」。6/7.8に龍胆寺雄「批評の批評 大森義太郎氏に応う」がある。 また、久野の後に、8/13,14朝刊に大森龍、 郎「ピエロの倫理 久野豊彦氏に答える」。
1930	9		近代生活	2-9	文芸時評―大森義太郎氏の文芸時評について、共同 制作と代作、芸術に於けるRealityについて、Die neue Sachlichkeit、創作について―			
					第二貧乏物語 (試写室)題は忘れたが			
					日曜日展く			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
1930	9	12	読売新聞	朝刊	ジャン・コクトオの手袋	艶文蒐集	第一書房	
1930	10		近代生活	2-10	マルキシストの商売―これもまた、現代の手軽な売買の一種か― 共同制作について			
					(試写室)渦巻〈都会			
1930	10		中央公論	45~10	1930年			浅原六朗、龍胆寺雄との3人の共同制作
1930			文学時代		土を喰べにゆく―この一篇は食土記その他に拠る―			
					波のなかにて	-		
1930	11		近代生活	2-11	「女性危機」座談会			三宅やす子、柳原燁子、久布白落実、山 わか、大宅廿一、浅原六朗、久野豊彦、中 武羅夫
	ļ				「悲歌」について			
	- !				続彼と彼女			
				<u></u>	恋愛の予算張―共同制作―			吉行エイスケ、楢崎勤との3人の共同制作
1930	11		新潮	27-11	(映画時評)十月の映画評			
					「小説の将来」「映画の将来」合評会 第八十七回新潮 合評会		-	新居格、中河與一、大宅壮一、飯島正、村底稼、袋一平、平林初之輔、川端康成、四三郎、久野豊彦、中村武羅夫
1930	11		文学時代	2-11	玩具の煙			
1930			文芸春秋		(文壇是々非々)共同制作への非難に就て			
1930	1930 12		近代生活	2-12	一九三〇年の文壇を顧る			
					一九三〇年の清算			
					一九三〇年の印象・ABC 「一九三一年・待望」座談会			久野豊彦、新居格、阿部金剛 浅原六朗、岡田三郎、川端康成、久野豊 彦、 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
1930	12		作品	1-8	(今年発表した一ばん好きな自作について)			* (M. M. L.
1930			新青年		チュウインガムをかんでるキリスト			
1930	12		新潮	27-12	(昭和五年に発表せる創作・評論に就て)割合に書いた 司祭ワイエルストラッス―これは、数学の大家ノワイエ			
					ルストラッス氏ではない―			
1930		1	葡萄園		ダグラスの経済学について			
1930			文学風景	1-8	一九三〇年の回想			
1931	1		近代生活	3-1	日記			
					海戦を写生する	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
1931	1		新潮	28-1	強制主義と集中主義を排す	84 45 Au	AT -	
1001		_	表 水 水 水	東日 王山	(逢つて見たい男、女)張学良とへイ女史	艶文蒐集	第一書房	
1931	- 1		読売新聞 読売新聞		(新春小品)真実とは? (小品)ピアノ			
1931	1	- 13	新文学研究	1	共同制作について			
1931			文学時代	3-1	村のキリスト			
				1				
1931	2		新潮	28-2	龍胆寺雄を語る新作家のプロフィール(2) 天真爛漫 			岡田三郎、貴司山治、上出泉秀信、淺原; 朗、陶山密、大宅杜一、久野豊彦、龍胆寺
				-	±		<u> </u>	雄、中村武羅夫 中村武羅夫、久野豊彦、阿部知二、谷川
1931	3		近代生活	3-3	最近文壇にをける諸問題についての論争 文壇時評―小林秀雄氏の評論について、時事新報の			三、龍胆寺雄、雅川滉、吉行エイスケ、飯正
				\perp	連載小説新東京風景—			
	3		新科学的	2-3	ラディゲ ドルヂエル伯の舞踏会について			
1931							,	,
1931 1931			新潮	28-3	昔とあべこべね			
	3		新潮 文学時代	28-3 3-3	昔とあべこべね 首を接換へた侏儒			
1931	3							3/12,13,14の3回

4004			Ar AM TH rAn			T .		
1931	4		新文学研究	2	ラディゲの『ドルヂエル伯の舞踏会』について			4/9.10の2回。
1931	4	9	東京朝日新聞	朝刊	被こそ日本の世界選手 廿年振りに帰朝する舞踏家イトオ・ミチオ氏!			
1931	5	1	近代生活	3-5	国際的な文学について			
					(尖端都会狂騒曲)共同便所探訪			
	ĺ	.			解剖台上のわが大宅壮ー―彼のインチキ性、彼の左翼			新井格、浅原六朗、久野豊彦、岡田三郎
					性と右翼性、彼のセンチメンタリズム、彼の女房運、彼 の処世的遊泳術			
					恋愛・女・文学			岡田三郎、阿部知二、雅川漠、舟橋聖一、2 原六朗、久野豊彦、吉行エイスケ、飯島正、 龍胆寺雄
					イトウ・ミチオ氏と語る			
1931	5		新潮	28-5	文学技術について			
1931	5		文学時代	3-5	(都会を診断する)病院			
1931	6	ĺ	近代生活	3-6	不運つづき	艷文蒐集	第一書房	
					解剖台上のわが龍胆寺雄―何が彼を人気者にさせたか、彼のモダン味と非モダン味、彼の性的生活、野心家・計画家としての彼、彼のポオズ―			龍胆寺雄、楢崎勤、浅原六朗、久野豊彦
	1				相互素破抜掛合			浅原六朗、久野豊彦
•	:	:			金・享楽・結婚			浅原六朗、龍胆寺雄、楢崎勤、嘉村磯多、 飯島正、久野豊彦、中村武羅夫
ĺ	1	;			雀のこと[ロ・パルダン]			
1931	6		新科学的		ミチオ・イトウのこと	艶文蒐集	第一書房	
1931			新興芸術研究	2	文学に於ける技術はなぜ優位な地歩を占むるか	-37176-1	7. = 47	
1931	6	-+	新潮		(女性建築)彼女の腕	艷文蒐集	第一書房	
1931	\rightarrow		近代生活	3-7	文芸時評—新人批評—			
1				1	初めに行為ありか		1	
								岡田三郎、龍胆寺雄、嘉村磯多、久野豊彦 中村武羅夫、川端康成、山田一夫、庄野吉 信、浅原六朗
1931	7		新青年	12-9	脳髄の鏡			
1931	7		新潮	28-7	ハアマン王国の灯台守			
1931	8	Ţ	近代生活	3-8	海のナンセンス夫人	艶文蒐集	第一書房	
					ランデ・ヴウ			岡田三郎、龍胆寺雄、嘉村磯多、久野豊彦 中村武羅夫、川端康成、浅原六朗、雅川滉 吉行エイスケ、楢崎勤、阿部知二
1931	8		作品	2-8	(作家、批評家、画家、ヂャーナリスト交友録)友達			
1931	8		新潮	28-8	イロテイクな黒い蝶			
1931	9		近代生活	3-9	最近のプロ文学			
					(時代の第一人者)新らしい作曲家			
1931			文学時代	3-9	日清戦争奇談			
1931			近代生活		なに? 反動的?			
1931			新潮		生活の断面図			
1931			近代生活		空気銃	84	**	
1931	\rightarrow	-	新科学的		足のない水泳選手	艶文蒐集	第一書房	12/13,15,16の3回
		_	読売新聞 東京報日新聞		新社会派小説 新芸術創造への提言			12/29.30の2回
		+	東京朝日新聞	明計	靴と帽子 計開定			
1932 1932	-		小説 新潮	·	訪問客 新興芸術派は分裂か「新興芸術派」の立場から			
1932			新潮 読売新聞		新典芸術派は万袋が――「新典芸術派」の立場から― (1932年の尖端月景3)どちらが酔っぱらい?			
1932			新潮		新社会派文学に就いて			
1932			新/M 文学・クオタリイ		海戦を写生する	-		1931.01「近代生活」所載の小説の再録
1932			メチ・フォラリ1 新潮		(新旧東京名所図絵)新宿新風景	艶文蒐集	第一書房	
1932			文科	4	新即物主義?	ルヘルボ	्र ≡ार्	
1932		-	又付 新潮		おりでは、			
1932			初/m 近代生活	4-4	混沌たる現文壇			
1932			経済往来	7-5	マダムの悪戯			
1932		-+	新潮		文学は旧態のままでいいか			
,,,,,			494, 7794		新しき文学の動向に就て「新心理主義」文学、新社会派、「主知主義」文学、ロマン派			岡田三郎、伊藤整、板垣鷹穂、久野豊彦、 居格、小林秀雄、阿部知二、川端康成、浅 六朗、中村武羅夫
			文学時代	4-5	飛び出したピエロ			
1932	5	_			野球の真髄	艶文蒐集	第一書房	
1932 1932	_	-	新科学的	3-5				
	5		新科学的 新潮	3-5 29-6	不景気と失業			
1932 1932	5 6				不景気と失業 人生特急			10/7まで連載
1932 1932	5 6 6	10	新潮					新居格、岡田三郎、川端康成、雅川滉、舟
1932 1932 1932	5 6 6 7	10	新潮 時事新報	29-6	人生特急			新居格、岡田三郎、川端康成、雅川滉、舟 橋聖一、久野豊彦、阿部知二、中村武羅夫

1932	10				文学の表現原理について	最近の文学文章研 究と国語教育	厚生陽書店	
1932	11		新潮	29-11	煤煙と夜の花Aにあたへる(本所風景)			
1932	12		新科学的	3-12	「人生特急」発禁について			
1933	2	17	読売新聞	朝刊	(訊くべきこと言ふべき事 10)純粋文学の下火に対し擡頭すべき文学は何か 浅原六朗氏に問ふ			浅原六朗の返答「純文学の暴落と新社会文学の発生」
1933	4		新潮	30-4	射撃魚			
1933	5		新青年	14-5	黄金狂時代のからくり		1	
1933	9		人物評論	1-7	金の鯱			地方色小説集の1つとして
1933	12		翰林	1-5	勝負ごと			
1933	12		新潮	30-12	植物の心臓について			
1934	4				文学とテンポ	日本現代文章講座3 組織編	厚生閣	
1934	7				現代芸術派文学	日本現代文章講座7 研究編	厚生閣	
1934	8	21	読売新聞	朝刊	武器と文学			1934.8/21,23,24の3回。
1934	10				誇張的表現の効果と方法	日本現代文章講座2 方法篇	厚生閣	
1934	11				随筆の構成と技術	日本現代文章講座5 技術篇	厚生閣	
1934	12		東京朝日新聞	朝刊	文芸所感		·	12/16「文芸所感(一)シヤドルヌの日本観」 12/17「文芸所感(二)再吟味流行りのこの 頃」、12/18「文芸所感(三)私小説打開の問題」
1935	8		読売新聞	朝刊	(人跡未踏の扉を開く)読物としての探検小説			8/1,2,6の3回。
1935	8		東京朝日新聞	朝刊	(夏の読物)ジャングル マニア	-		8/30「(夏の読物)ジャングル マニア1」、 8/31「(夏の読物)ジャングル マニア2」。ト ランスに言及。
1935	12	20	読売新聞	朝刊	社会小説出よ 現代作家取材の欠陥			12/20,21,22の3回
1936	2		月刊文章	2-2	宇野浩二鑑賞(鑑賞講座)			
1936	2		中央公論	51-2	死線に踊るスパイ			
1936	3		月刊文章	2-3	(哀歓青春自叙伝)青春空し			
1936	4		月刊文章	2-4	金髪美人			
1936	5		月刊文章	2-5	(青空と微風)萌え出づる創作慾を			-
1936	6		月刊文章	2-6	初夏と自然描写			
1936	8		月刊文章	2-8	ウナムノの文章論	-		
1936	8		文芸懇話会	1-8	平生文相の印象			
1936	9		月刊文章	2-9	天国へは行きたくない			
1936	10		月刊文章	2-10	山と文学			
1936	12		月刊文章	2-12	兜町			
1936			文芸懇話会	1-12	道徳と経済			
1937	2		月刊文章	3-2	(わが同人雑誌時代)葡萄園時代のこと			
1937	4	27	東京朝日新聞	朝刊	大臣と恋愛論 西班牙のジャンヌダーク フェデリカ・モンツエニー			
1937	5		月刊文章	3-6	(現代小説の根本問題)日本語と表現の可能性			
1937	- 6	inn	月刊文章	3-7	主題の生み方と纏め方			
1937			月刊文章	3-9	小説の没落			
1937			月刊文章		海底ルポルタアジュ			
1937			月刊文章		(文章とモダニズム)表現上のモダニズム			
1937	-	-	月刊文章		闘争美と戦争の美学			
1938			改造		揺らぐ相場街			
			三田文学	20 12	時間		 	
1961 1967			二四人子 名古屋商科大 学論集	12	ダグラスィズム	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
1967	9		工	12	私の履歴書			

【著作集·翻訳書】

出版年	月	発行所	書名	内容·備考
1927	12	春陽堂	第二のレエニン	第二のレエニン セヴィラの理髪師 化粧学校のファスシスト エルドマン氏の途方もない栄達 一九二〇年代の人間紛失 郵税 靴 瀬月の島 昇降器 ウオータア・メロンのラ式競技

1930	4	新潮社	連想の暴風	月で強が釣れたなら 薔薇の花のついた寝台 北京の頃の絵 サンパ! 彼女と盗人 徒然草一巻 布哇の月・水・兵! 李大石 虎に化ける 青龍波 ある転形期の労働者 シャッポで男をふせた女の話
1930	5	天人社	新芸術とダグラスイズム	芸術派と新経済学説 ギリシヤの旅に就て 連想の暴風 芸術派は何故に抬頭したか 文学とダグラスイズム 新文学とその任務 ダグラス印象記
1930	6	新潮社	十三人俱楽部	彼と彼女
1930	7	改造社	ボール紙の皇帝万歳	ブロッケン山の妖魔 野球哀話 時計が空つぼになつた時刻 評判の悪い著 数 カビの生えたレンズ ボール紙の皇帝万歳 月にでも登ってみたい バルセロナの微笑 腰臓ダンサア 村の騒動 ソヴェットロシアの老政治家 スポルティフな女の詩集 徳に追はれて、彼と彼女
1001		春陽堂	分分三寸污经冷墨人集 做点 机光黑亚胺	(翻訳)カズンス著
1931 1931		春陽堂	ダグラス派経済学全集 第5 新労働政策 ダグラス派経済学全集 第7 ダグラスの経済哲学	(翻訳)ダグラス著
1932	7	厚生關書店	新社会派文学	新社会派文学の発生過程(久野豊彦) 新社会派文学に就いて(久野豊彦) 新社会派文学に就いて(久野豊彦) 新社会派文学の主要点(浅原六朗) 新社会派文学のま要点(浅原六朗) 新社会派文学の非難について(久野豊彦) 時代相・文学(浅原六朗) 新社会派文学の素材(浅原六朗) 新社会派文学の素材(浅原六朗) 新社会派文学の素材(浅原六朗) 新社会派文学の素材(浅原六朗) 新社会派文学の素材(浅原六朗) 新社会派文学の素材(久野豊彦) 哲社会派文学の集まは(久野豊彦) 哲社会派文学発生の基調(久野豊彦) 恋愛に生産面を與へよ(浅原六朗) 新社会派と大衆(浅原六朗) 新社会派と大衆(浅原六朗) 新社会派とでの実験(久野豊彦)
1932	10	第一書房	艷文蒐集	・ 整文蒐集、彼女の腕、歪んだ赤い唇、老侯爵の靴、パノと帽子、満州の 搞草、百歳の子供、野球の真髄、張学良とヘイ女史、ジャン・コクトオの 手袋、フィリップの芸術、チャップリンのこと、天真爛漫、龍胆寺雄、青年 紳士・中河與一、ミチオ・イトオ、ポオル・モオランから私へ、足のない水 泳選手、虎が湯婆をかかへてゐる、万年養、冷たい生活、不運つづき、 動いで壮方ない、朱の色について、文士とスポオツ、お正月と珍客、眼を 病な霊か、新金貨と彼女、形式と貨幣論、兜町と文学、最近の日本、新 宿新風景、横浜の夜、海と郵便配達夫、蟹工船と銀行、帽子、紅い蟹の 構、魚の扇、水中の街、海上の夫婦喧嘩、不思謙な白い船、巴里の屋根 の下と嘆きの天使、海のナンセンス夫人、看板が落ちてくる、叱らせさう な幻想、蝶々のやうに、ここは武蔵野、胃が唸ってゐる、舞踏の秘遊び、 大司教の御前、花作りの御子、大泥棒秘話
1932	11	千倉書房	人生特急	
1933		春陽堂	ナポレオン伝	
		第一書房	雪山の生活者	(翻訳)トレンカー著
		第一書房	青年の計画	(翻訳)ピトキン著
		借成社	人は何故に失敗するか	(翻訳)W・A・ホワイト著
		教材社	人生の注意書き	
		大日本雄弁会講談社	山岳征服冒険記	
		実業之日本社	ソ連は今後どう動くか	
1938		,		
		生活社	天理教の本義	
1938	7	生活社 玄海書房		
1938 1938	7 10	玄海書房	血・鉄・利潤:武器・情報・スパイ	
1938 1938 1941	7 10 10			(翻訳)トオランス著